

「自然保育」に関する認定が保育士の意識と行動に与える影響 「信州型自然保育」認定を受けた公立保育園への調査を通して

山口 美和*・寺 眞智子**

(令和元年8月29日受付；令和元年12月17日受理)

要 旨

本研究の目的は、長野県が創設した「信州型自然保育認定制度」による認定を受けた公立保育園の保育士への調査を通して、認定の前後で、保育士の意識と行動がどのように変化したのかを明らかにすることである。長野県のA市の公立保育園のうち、平成29年度までに信州型自然保育の普及型認定を受けた13園に勤める保育士158名を対象として、自記式質問紙調査を実施した。その結果、自然保育認定前に比べ、雨の日の散歩や川遊び、全身が汚れるような泥遊びなど、自然を活用した保育のうち8項目について、認定後は実施頻度が有意に高くなっていることがわかった。また、認定後は、屋外での遊びや活動を積極的に取り入れ、自然に関する知識を深めようとする意欲や探究心が高まり、屋外での保育に対する保育者の自信が高まっていることから、県からの認定は、各園や保育者が実践を振り返り、その意味を再認識するため契機として作用していることが明らかになった。一方、9割近くの保育士が自然保育に関する知識・スキルを得るための研修への参加を望んでいることから、保育者が研修に参加しやすい環境づくりが、今後の課題として浮き彫りとなった。

KEY WORDS

自然保育、信州型自然保育認定制度、公立保育園、保育士、普及型認定

1 はじめに

1. 1 問題の所在

本論文の目的は、自治体が主導して実施している「自然保育」に関する認定が、認定を受けた園ならびに保育者に、どのような影響や効果を及ぼしているのかを明らかにすることである。

近年、長野県、鳥取県、広島県など、先進的ないくつかの自治体で、「自然保育」を推進するための認定・認証制度を創設・導入する動きが活発になっている。「自然保育」とは、長野県の定義によれば「豊かな自然環境や地域資源を積極的に活用した様々な体験活動によって、子どもの感覚が豊かに刺激され、子どもの主体性、創造性、社会性、協調性等が育まれ、心身ともに健康的に成長することを目指した保育等¹⁾」を指す。こうした保育・幼児教育のスタイルは、我が国では、「森のようちえん²⁾」や「野外保育」等の名称で、40年近くにわたって、各地で実施されてきた歴史がある。近年の自治体による動きは、「森のようちえん」が伝統的に行ってきた保育実践に一定の評価を与えた上で、一般の幼稚園や保育所、認定こども園等のさまざまな就学前施設においても、同様の実践が広がることを企図したものである。

このうち、2015（平成27）年に「信州型自然保育認定制度」を創設した長野県では、2019（令和元）年8月現在で、県の「認定」を受けた園は185団体に上っている。長野県の制度は、後述するように認定の区分が「特化型」と「普及型」にわかれているのが特徴であるが、「森のようちえん」のように「自然保育」に重点を置いて取り組んでいる「特化型」認定に比べ、一般の就学前施設を主な対象とする「普及型」の認定の数が圧倒的に多い。また、「普及型」の中でも、公立の保育園・認定こども園等の数はとりわけ多く、認定数は134園に上っている³⁾。この背景には、「自然保育」に積極的な市町村などは、域内の公立就学前施設について一括して、あるいはある程度の数の園をまとめて認定申請を行う傾向があることを指摘することができる。つまり、長野県の「自然保育」認定団体の急増の背景には、県が示す「自然保育」推進の方向性に賛同し呼応する市町村がリーダーシップをとり、積極的に公立保育園等の認定申請を行っているという構造があるのである。このように「自然保育」に積極的な各市町村が、管轄下の公立保育園等において認定園を増やそうとする傾向は、ある種のムーブメントとしての効果を生んでおり、県全体として「自然保育」への関心を高めていることは確かである。

*学校教育学系 **小矢部市石動きらりこども園

その一方で、各公立保育園や認定こども園の立場からすれば、保育者の総意というよりは市町村の意向で、いわば受身的に「自然保育」の認定を受けるという状況が生まれがちではないかという懸念もある。つまり、市町村からの指示によって、自分の勤務園がたまたま「自然保育」の認定園になっただけだとすれば、保育者が主体的に「自然保育」へのモチベーションを保つことが難しかったり、保育者の側に「自然保育」認定への戸惑いや反発が生まれたりすることがあっても不思議ではない。「自然保育」の認定が、真にそれぞれの公立保育園にとって意味のあるものになるためには、認定園に勤める個々の保育者自らが「自然保育」を実践する意義を見出し、各園を取り巻く地域や活動フィールドの実情を踏まえて、保育実践に命を吹き込むことが不可欠なのである。しかし、「信州型自然保育認定制度」は、創設からまだ間もないこともあり、認定園で実践を行っている保育者の意識等については、これまで本格的な調査は実施されていない。

実際に認定を受けた園で働く保育者は、「信州型自然保育」の認定を受けることをどのように受け止めているのだろうか。また、「自然保育」の認定前後では、日頃の保育実践の内容や、自然を活用した保育実践を行う際の意識にどのような変化が生まれているのだろうか。

われわれは、以上のような問題意識のもと、長野県による「認定」を受けた公立保育園に勤める保育者をターゲットとし、「信州型自然保育認定制度」そのものや、その認定に対する意識、また認定前後の保育者自身の意識や行動の変化を明らかにするために、質問紙調査を実施することとした。

1. 2 「信州型自然保育認定制度」の概要と先行研究の状況

「信州型自然保育認定制度」（通称「信州やまほいく認定制度」）は、2015（平成27）年4月に創設された制度で、長野県内にある就学前施設のうち、自然や地域資源を活用した保育・幼児教育を積極的に行っている団体に対し、県が定める一定の基準を満たした場合に「認定」を行うものである。「特化型」と「普及型」の2つの認定区分があるが、両者の差は、自然保育に特に重点を置いて実践を行うか、他の保育プログラムも並行して実践を行うかの違いのみであり、認定園に与えられる資格や扱いとしては同格である。「特化型」の認定を受けるためには24項目、「普及型」の認定を受けるためには22項目の基準が設けられている。「特化型」「普及型」に共通する基準の観点として、「団体運営の安定性や自然体験活動の計画性」（4項目）、「自然体験活動の計画性及び環境と時間の確保」（3項目）、「保育及び自然体験活動の質の担保」（特化型6項目／普及型5項目）、「屋外での体験活動における安全管理」（特化型7項目／普及型6項目）、「地域との連携」（1項目）、「小学校との連携」（1項目）、「個人情報保護」（1項目）の7つの観点が設けられているが、両者の基準には違いもある。最も明確な違いは屋外における体験活動の時間数で、「特化型」の場合は、「週15時間以上」となっているのに対し、「普及型」は「週5時間以上」となっている。「特化型」ではこれに加え、「2年以上の自然体験活動の指導経験を有する常勤の保育者が半数以上いること」や、「2年以内に安全管理の専門講習を受講した保育者がいること」など、安全管理体制について特に厳しい基準が設けられている。

長野県から自然保育の認定を受けることによる園側のメリットとしては、県からの認定証が交付され、県の用意するポータルサイトに情報を掲載できることに加え、施設種別を超えた保育者の交流会に無料で参加できることや、自然体験専門指導者を自園に招いて研修が行えることなどがある。いずれも、長野県が公的に「認定」を与えることによって、園の認知度や信頼性を高めたり、研修等によって保育の質を向上させたりするという、間接的な支援であることが特徴である。同時期に創設された鳥取県の「とっとり森・里山等自然保育認証制度」（2015（平成27）年3月創設）が、創設当初は「森のようちえん」の運営費の公的補助を行うことを目的とした制度だったのとは対照的に、長野県の制度では「認定」を受けること自体は、運営費補助と直接的には結びついていない。これは、長野県の認定制度が、「森のようちえん」のみならず、幼稚園、保育園、認定こども園など、保育・幼児教育を行うすべての就学前施設を対象としているためである。

山口（2016）は、「信州型自然保育認定制度」の検討段階の議論の分析を通して、認可施設と認可外施設とを包摂するすべての就学前施設を対象とする制度を可能にした背景として、「自然保育」という新しい共通概念の導入が大きな役割を果たしたことを指摘している。すなわち、「森のようちえん」のように1日の大半を野外で過ごすのでなくとも、身近なフィールドの環境を見直し、日常的に行っている保育の中で、子どもたちが自然に触れる機会を増やすように配慮することによって、一般の園にも十分取り組める、とするのが長野県の提唱する「自然保育」なのである。自然を積極的に活用するというアプローチをとる点において、「認定」を受けるすべての就学前施設は平等である。「信州型自然保育認定制度」の創設によって、長野県内の就学前施設に勤める保育者が、「自然保育」という共通理念のもとに、所属する施設種別を超えて結びつき、互いの保育実践についての情報を交換し合い、交流できるような環境が構築されたと言える。たとえば長野県の主催する「やまほいく研修交流会」は、認定園の保育者が他園での

「自然保育」の実践を体験的に学び、グループで分かち合うためのプログラムが用意されており、毎年2～3回開催されている。

長野県と鳥取県の「自然保育」に関する認定・認証制度は、創設から4年を経過しようとしており、広島県もそれに続いているが、制度の効果や影響に関する研究はほとんど進められていないと言って良い。これまで、「自然保育」に係る認定・認証制度を対象とした研究として確認できるのは、「信州型自然保育認定制度」の創設過程における、幼児教育に関わる境界線の引き直しのプロセスについて議事録分析を通して明らかにした山口（2016）や、同様に創設過程の分析によって幼児教育行政の可能性を示唆した高木（2017）の他、長野県の自然保育ポータルサイトに掲載された実践事例を分析した茶谷（2017）、信州型自然保育の研修会の実践を紹介する酒井（2018）など、ごくわずかである。とりわけ、自然保育に関わる保育者を対象とする実証的な研究は未だ行われていない。「自然保育」に関しては、先進県である長野県、鳥取県、広島県の知事を発起人とする「森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク」が2018（平成30）年に発足し、全国16県98市町村が参加するなど、大きな広がりを見せている現在、「自然保育」に関する認定制度が保育者にどのような影響や効果を与えているのかを、質問紙調査を通して実証的に明らかにしようとする本研究は、大きな意義を有するものである。

2 調査の概要

2. 1 調査対象

長野県A市内の公立保育園に勤める保育士を対象とした。A市は、2019（令和元）年8月現在、19の公立保育園が信州型自然保育の認定を受けている。このうち、2017（平成29）年度までに認定を受けた13園を調査対象園として抽出した。これは、調査実施時期である2018年11月の時点で、ある程度の期間、認定制度のもとで保育を実施した実績がなければ、保育士の意識や行動の変容が測定できないと判断したためである。

最終的に、抽出した13園に勤める保育士のうち、パート勤務を除く158名の保育士を対象とした。

2. 2 調査期間及び調査方法

2018年11月12日～11月22日に、市役所及び各園の園長を経由する託送法による自記式質問紙調査を実施した。

3 調査結果

3. 1 回収率と回答者の属性

3. 1. 1 回収数及び回収率

158部を配布し、148部を回収した。回収率は93.7%であった。

3. 1. 2 回答者の属性

(1) 性別

男性が6名（4.1%）、女性が141名（95.3%）、無回答1名（0.7%）であった。

(2) 年齢

20代が36名（24.0%）、30代が35名（23.3%）、40代が43名（28.7%）、50代が26名（17.3%）、60代以上が8名（5.3%）であった。

(3) 保育者としての経験年数

保育者としての経験年数は、10年未満が53名（35.8%）、10年以上20年未満が53名（35.8%）、20年以上30年未満が26名（17.6%）、30年以上40年未満が7名（4.7%）、40年以上50年未満が4名（2.7%）、60年以上が1名（0.7%）、無回答が4名（2.7%）であった。

(4) 現在の園での勤務年数

現在の園での勤務年数は、3年未満が100名（40.5%）、3年以上5年未満が32名（21.6%）、5年以上7年未満が8名（5.4%）、7年以上10年未満が3名（2.0%）、10年以上が1名（0.7%）、無回答が4名（2.7%）であった。

(5) 勤務形態

正規雇用が60名（40.5%）、臨時雇用が1名（0.7%）、嘱託雇用が82名（55.4%）、その他が3名（2.0%）、無回答

が2名(1.4%)であった。

(6) 役職

園長が11名(7.4%), 主任が12名(8.1%), 特になし118名(79.7%), その他が6名(4.1%), 無回答が1名(0.7%)であった。

(7) 現在の園に勤めるまでの勤務状況

初任者など、現在の所属園が初めての勤務園である保育者は33名(22.3%)であった。

3. 2 「信州型自然保育」認定前後における保育の変化

3. 2. 1 自然を活用した保育の実施状況

自然や地域資源を活用した保育を、日頃の保育の中でどのくらいの頻度で実施しているかを尋ねた。「全身服が汚れるような泥遊び」「雨の日の散歩」「川遊び」「自然物を使った工作」「草花色水遊び」「自然物収集」「地域探検」「冬の雪遊び」「動物飼育・植物栽培」「全身が濡れるような水遊び」の10項目について、「制度認定前/現在の園に異動前」と「現在」の実施頻度を比較して、それぞれ「よく行っていた/いる」「ときどき行っていた/いる」「あまり行わず」「全く行わず」の4件法で回答を求めた。保育の実施頻度については、保育者の主観が入りやすいため、目安として「よく行っていた/いる」は概ね週1回以上、「ときどき行っていた/いる」は概ね月1回以上を指すものとして、回答してもらうようにした。なお、初任者など、現在の所属園が初めての勤務園である保育者33名については、「現在」についてのみ回答してもらった。

Fig.1は、現在の園における、自然を活用した保育の実施頻度を示したものである。

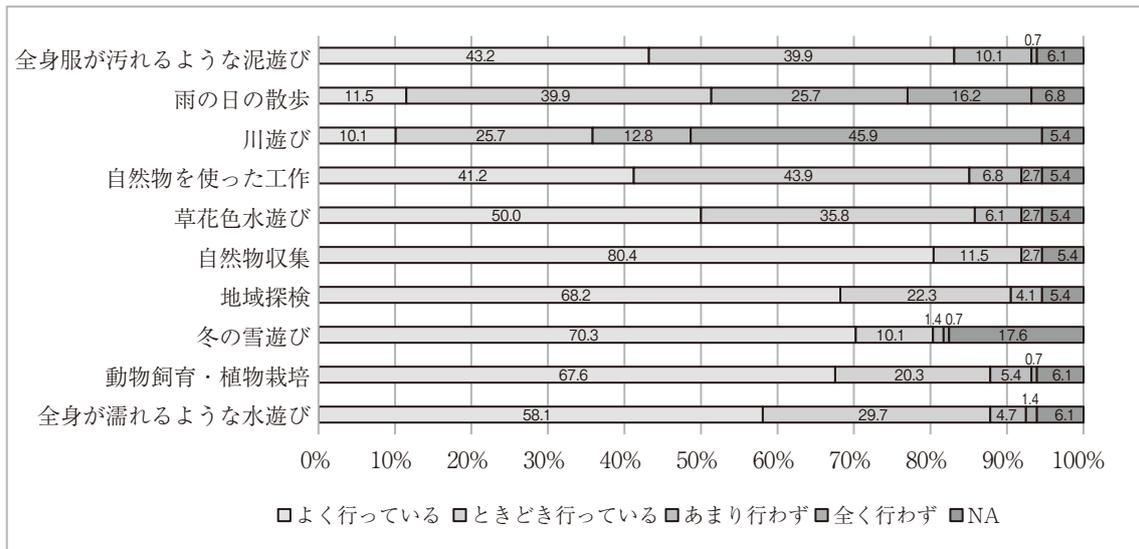


Fig.1 自然を活用した保育の実施頻度 (現在) (N=148)

「自然物収集」(80.4%)や「冬の雪遊び」(70.3%)については、「よく行っている」と回答した保育者が7割を超えており、「地域探検」(68.2%),「動物飼育・植物栽培」(67.6%),「全身が濡れるような水遊び」(58.1%),「草花色水遊び」(50.0%)についても半数以上の保育者が「よく行っている」と回答している。一方、「雨の日の散歩」(11.5%),川遊び(10.1%)はいずれも、「よく行っている」と回答した保育者の数は1割程度にとどまっている。

現在の所属園が初めての勤務地であるなど、制度認定前後の保育を比較できないと答えた保育者33名を除外した115名について、「制度認定前/現在の園に異動前」と「現在(認定後)」の保育の実施頻度を比較した。Fig. 2はそれぞれの項目について「よく行っている」と「ときどき行っている」を合わせた数を比較したものである。

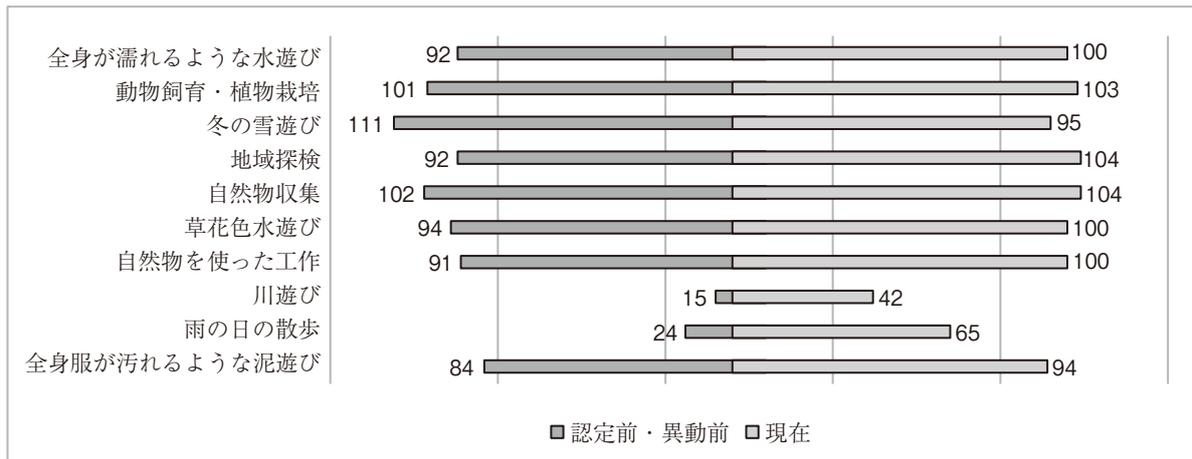


Fig. 2 自然保育認定前後の自然を活用した保育の実施頻度 (N=115)
(数値は「よく行っている」「ときどき行っている」の合計の度数)

「冬の雪遊び」を除く全ての項目で、「制度認定前」に比べ、「現在」の方が実施頻度が高くなっていることがわかる。「冬の雪遊び」について「現在」の方が低い値となっているのは、調査実施時期が11月であったため、今年度異動してきた保育者が、まだ現在の園での冬を経験しておらず、回答できなかったことが影響している。特に、「川遊び」と「雨の日の散歩」について、認定前後の実施頻度の伸びが大きいことが見て取れる。

活動を行う頻度についての回答のポイントを、「よく行っている」= 4、「ときどき行っている」= 3、「あまり行わず」= 2、「全く行わず」= 1とし、「現在」と「制度認定前」との実施頻度の平均値についてt検定を行った結果が、Table. 1である。「冬の雪遊び」「動物飼育・植物栽培」を除く全ての項目で、平均値に有意に差があることがわかった。自然保育認定前に比べ、認定後の現在の方が、保育者は自然を活用した保育を実施する頻度が高くなったと考えていることが明らかになった。

Table. 1 自然保育認定前後の自然を活用した保育の実施頻度 (t検定の結果)

	平均値の差 (現在 - 認定前)	t 値	
全身が汚れるような泥遊び	0.22	3.748	**
雨の日の散歩	0.84	7.291	**
川遊び	0.59	4.885	**
自然物を使った工作	0.39	5.816	**
草花色水遊び	0.25	3.649	**
自然物収集	0.32	4.437	**
地域探検	0.44	5.149	**
冬の雪遊び	-0.01	-0.185	
動物飼育・植物栽培	0.13	1.967	
全身が濡れるような水遊び	0.20	3.889	**

*p<0.05, **p<0.01

3. 2. 2 自然を活用した保育に対する保育者の意識

自然を活用した保育に対する保育者の意識を尋ねた。「屋外遊びで子どもの手や服が汚れることに抵抗感がある」「屋外遊びには危険が伴うので尻込みする」「植物や動物に関する知識を得ようとしている」「自然の中で遊ぶことは子どもにとって必要であると思う」「屋外での保育に自信がある」「雨や風の日に屋外での活動を取り入れたいと思う」「天気の良い日は屋外で体を動かす機会を設けたいと思う」「散歩や地域探検を通して自然に触れてほしいと思う」「もっと屋外での活動を保育で取り入れたいと思う」「屋外活動に関する知識を得る機会があれば参加したい」の10項目について、「制度認定前／現在の園に異動前」と「現在」の実施頻度を比較して、それぞれ「とても思う」「まあそう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法で回答を求めた。

Fig. 3 は、自然を活用した保育に対する現在の意識を示したものである。

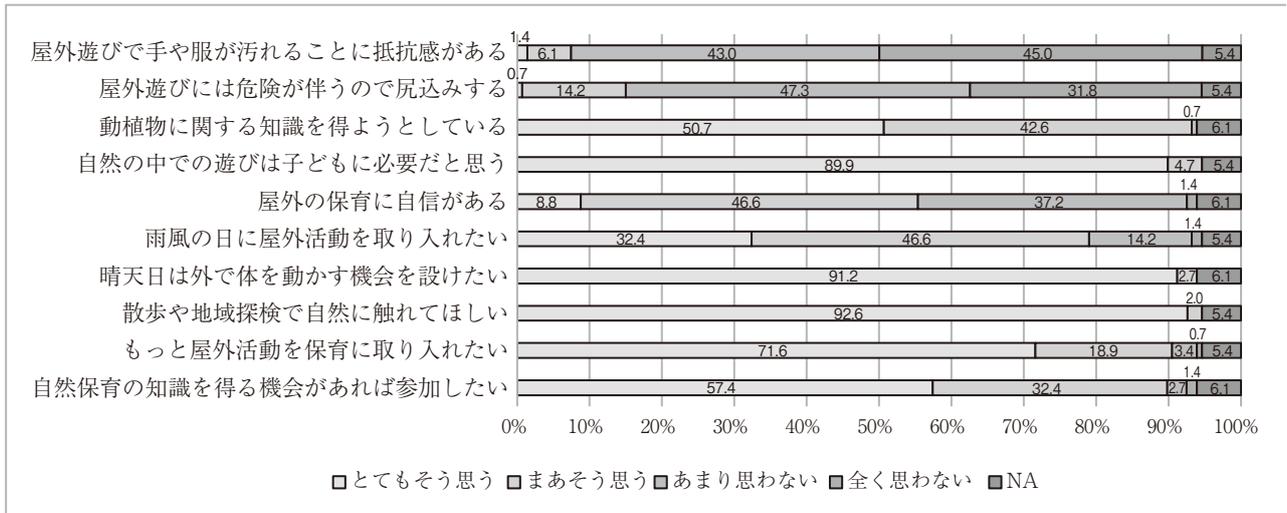


Fig. 3 自然を活用した保育に対する意識（現在）（N=148）

「散歩や地域探検を通して自然に触れてほしい」（92.6%）、「天気の良い日は屋外での活動を取り入れたい」（91.2%）、「自然の中で遊ぶことは子どもにとって必要であると思う」（89.9%）については、9割近くの保育者が「とてもそう思う」と回答している。ほとんどの保育者は、屋外で自然に触れることの重要性を認識しており、実際に天気の良い日には地域を散歩するなど、屋外での活動を積極的に取り入れようとする意識を有していることがうかがえる。

また、「屋外遊びで子どもの手や服が汚れることに抵抗感がある」「屋外遊びには危険が伴うので尻込みする」に対しては、約8割の保育者が「あまり思わない」「全く思わない」と回答しており、屋外遊びに対する心理的な抵抗感は少ないと言える。

Fig. 4 は、自然保育認定前と現在での、自然を活用した保育に対する意識を比較したものである。数値は、「とてもそう思う」と「まあそう思う」と回答した保育者を合計した数である。

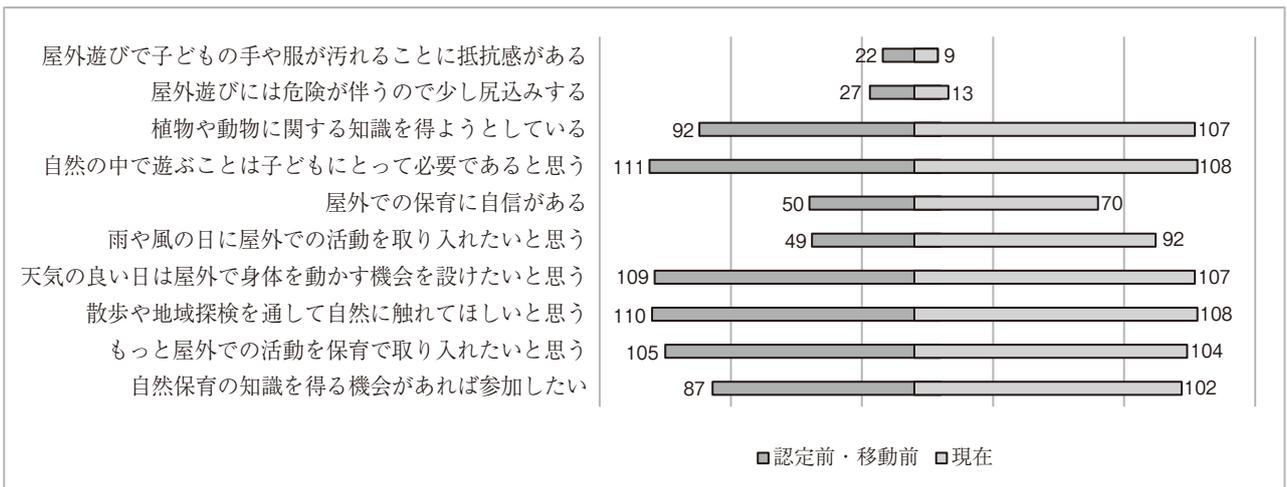


Fig. 4 自然保育認定前後の自然を活用した保育に対する意識（N=115）
（数値は「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計の度数）

「雨や風の日に屋外での活動を取り入れたいと思う」について、認定前は「とても／まあそう思う」と回答したのは49名だったのに対し、現在は92名が肯定的に回答するなど大幅に増加している。同様に「屋外での保育に自信がある」（50→70）、「屋外活動に関する知識を得る機会があれば参加したい」（87→102）、「植物や動物に関する知識を得ようとしている」（92→107）などでも、認定後の現在の方が肯定的な回答が増加している。認定後は、雨風の日に

屋外遊びを検討するなど、自然保育の幅を広げようとする意識の変化が見られ、自然に関する知識を積極的に得ようとすることによって、自然保育への自信も持てるようになってきていることがうかがえる。一方、「屋外遊びで子どもの手や服が汚れることに抵抗感がある」「屋外遊びには危険が伴うので尻込みする」については、認定後の方が、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した保育者数は減っている。屋外での保育につきものの汚れや危険に対して、心理的な抵抗感は減っていると見える。

保育者の意識についての回答を、「とてもそう思う」= 4、「まあそう思う」= 3、「あまり思わない」= 2、「全く思わない」= 1とし、「現在」と「制度認定前」の保育者の意識の平均値について、t検定を行った結果がTable. 5である。いずれの項目についても有意な差が見られ、自然保育の認定が、屋外での保育に対する保育者の意識に影響を及ぼしていることが明らかになった。

Table. 2 自然保育認定前後の自然を活用した保育に対する意識の変化 (t検定の結果)

	平均値の差 (現在 - 認定前)	t 値	
屋外遊びで子どもの手や服が汚れることに抵抗感がある	-0.2407	-4.213	**
屋外遊びには危険が伴うので少し尻込みする	-0.2130	-4.173	**
植物や動物に関する知識を得ようとしている	0.519	7.808	**
自然の中で遊ぶことは子どもにとって必要であると思う	0.204	5.232	**
屋外での保育に自信がある	0.278	5.146	**
雨や風の日に屋外での活動を取り入れたいと思う	0.722	9.438	**
天気の良い日は屋外で身体を動かす機会を設けたいと思う	0.159	4.191	**
散歩や地域探検を通して自然に触れてほしいと思う	0.250	5.972	**
もっと屋外での活動を保育で取り入れたいと思う	0.278	5.677	**
自然保育の知識を得る機会があれば参加したい	0.439	6.465	**

*p<0.05, **p<0.01

3. 2. 3 虫や生き物に対する親和度

自然の中で出会う虫や生き物に対して、どの程度慣れ親しんでいるかを尋ねた。高野他(2011)の尺度を援用し、「トンボ」「ダンゴムシ」「カマキリ」「バッタ」「カブトムシ」「カエル」「トカゲ」「ミミズ」「カタツムリ」「ニワトリ」「ザリガニ」「カメ」「カイコ」の13種類の生き物に対する態度について、「素手でも触れる」「捕ったり飼ったりした」「少し怖い」「触れたくない・逃げる・避ける」の4件法で回答を求めた結果が、Fig. 5である。

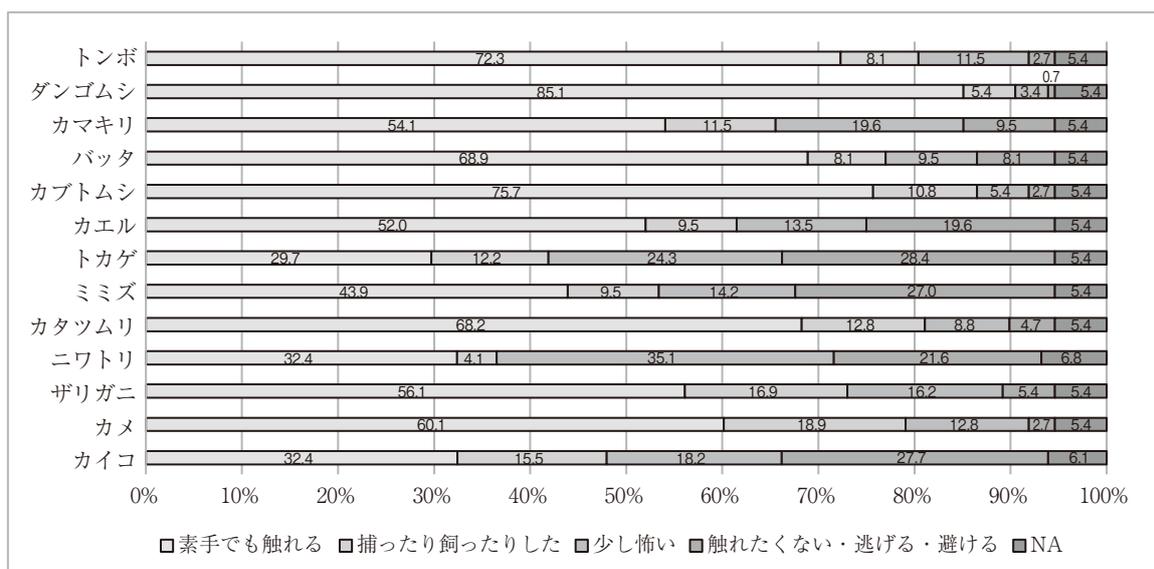


Fig. 5 虫や生き物に対する親和度

虫や生き物に対する親和度と、保育者の年齢との関連を見るために、クロス分析を行った。保育者を「20-30代」と「40代以上」の2群に分け、生き物に対する親和度については、「素手でも触れる」「捕ったり飼ったりした」と回答した群を「親和度・高群」、「少し怖い」「触れたくない・逃げる・避ける」と回答した群を「親和度・低群」としてクロス集計を行い、カイ2乗検定を行った。Table. 3は、保育者の年齢別にみた、虫や生き物への「親和度・高群」の割合を示したものである。

Table. 3 保育者の年齢別の虫や生き物との親和度 (%)

		20-30代	40代以上	ポイント差
		a	b	a-b
トンボ	**	73.1	95.8	-22.7
ダンゴムシ	**	91.0	100.0	-9.0
カマキリ	**	55.2	81.9	-26.7
バッタ	**	67.2	94.4	-27.2
カブトムシ		88.1	94.4	-6.3
カエル	**	50.7	77.8	-27.1
トカゲ		41.8	45.8	-4.0
ミミズ		47.8	63.9	-16.1
カタツムリ	**	73.1	97.2	-24.1
ニワトリ	*	28.4	48.6	-20.2
ザリガニ		70.1	83.3	-13.2
カメ		77.6	88.9	-11.3
カイコ	**	38.8	62.0	-23.2

*p<0.05, **p<0.01

(数値は「素手でも触れる」と「捕ったり飼ったりした」を合計した%)

「トンボ」「ダンゴムシ」「カマキリ」「バッタ」「カエル」「カタツムリ」「カイコ」については1%水準で、「ニワトリ」については5%水準で有意に差が見られた。全般的に、30代以下の若い保育者の方が、40代以上のベテランの保育者に比べ、生き物に対する親和度が低い傾向にあることが明らかになった。

3. 2. 4 自然を活用した保育の実施に対する園の雰囲気

信州型自然保育認定後の、自然を活用した保育の実施に対する園の雰囲気や環境について尋ねた。「園内で屋外での活動について話し合う機会が多い」「園全体として屋外での活動に関する研修会に参加する機会が多い」「園庭だけでなく地域など他のフィールドを積極的に使っている」「自然の中での活動について保護者からの理解を得やすい雰囲気だ」「屋外での活動を積極的に行うよう園から推奨されている」「園庭だけでなく園の周りのフィールドの環境も下見、整備している」「県外や市外からの移住者が入園するようになった」「屋外での活動が比較的自由にできる方だと思う」「屋外での活動の安全管理に対する職員の意識が高い」の9項目について、「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法で回答を求めた結果がFig. 6である。

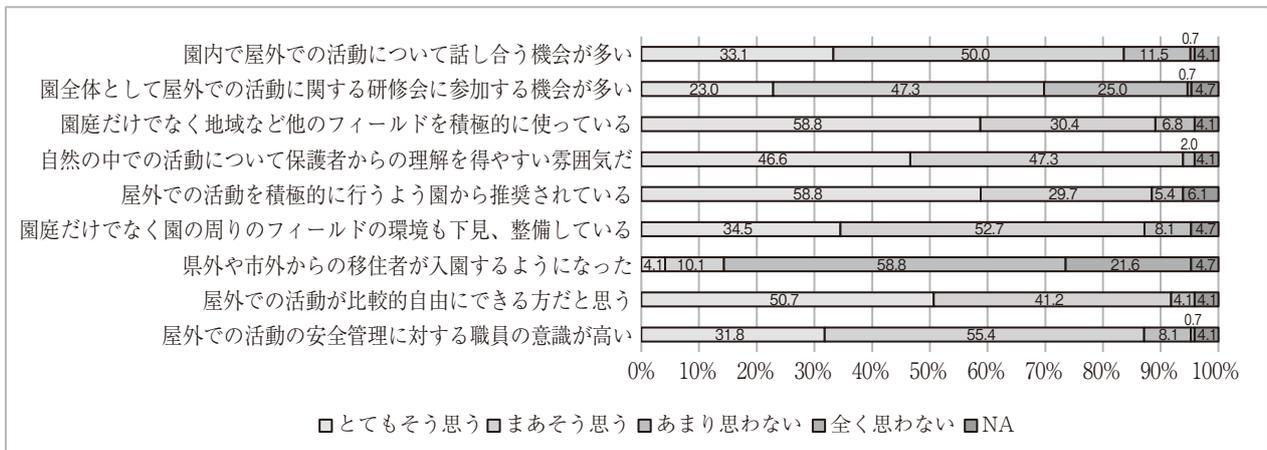


Fig. 6 自然を活用した保育に対する園の雰囲気

「県外や市外からの移住者が入園するようになった」については、否定的な回答が8割以上を占めたが、それ以外の項目については、概ね肯定的な回答が目立つ。認定を受けた後は、地域のフィールドを活用するなど、屋外での活動について、園全体で積極的に推進する雰囲気生まれていると言える。

3. 2. 5 保育者自身の見方・行動の変化や新たな気づき

自然保育認定後、園庭や園外の自然環境等、身近なフィールドに対する見方の変化や、新たな気づきがあったか、自由記述で回答を求めたところ、37名から回答があった。記述内容を整理・カテゴリー化したものがTable.4である。

Table. 4 保育者自身の見方・行動の変化や新たな気づき

カテゴリー	度数 (%)	主な記述内容 (抜粋)
保育者自身の行動や考え・意識の変化	18 (43.9)	散歩のコースに自然に触れて遊べる場所を普段から探すようになった／危ないからダメということではなく、どうしたら楽しめるかという視点を持つようになった／河原で何を遊べるかなど下見に行くようになった
園庭や身近なフィールドに対する利用方法の変化	11 (26.8)	園庭や園外の草花や木の葉や実などを子どもたちと一緒に探す機会が増え、それらを使った遊びや室内飾りなど積極的に取り入れるようになった／雨がっぱを準備してもらい、雨の日の散歩を取り入れるようになった／街の中を路地裏散歩として楽しむようになった
園庭や身近なフィールドに対する見方の変化や気づき	6 (14.6)	当たり前にあった園やその周辺の自然環境により目が向き、積極的に活用しようと思えるようになった／自然物で遊ぶことが自然保育だと考えていたが、自然の中で子どもが自由に走り回ったり、好きなことをしたりするだけでも自然保育だと気がついた
園や自治体、地域の変化	3 (7.3)	地域の方のサポートが多く受けられるようになった／認定前は衛生面、安全面が最重要だったが、認定後は少し緩くなったように感じる／(自然保育に関する)研修内容の研修等が増えている
子どもの姿の変化	3 (7.3)	自然と関わる中で子どもたちは和み、五感が育っている／散歩先でも保育士がじっくり見ていると“何?”と聞いたり、摘んでじっくり見たりする姿が見られるようになったり、草花の名前を伝えると覚えてしまう子もいた

3. 2. 6 自然保育に関する研修の受講状況

長野県が主催して実施している「やまほいく研修交流会」及び、A市が独自に実施している自然保育に関連する研修への参加状況と参加の動機を尋ねた。参加経験については「ある」「ない」の2択で回答を求め、参加の動機については、「自身の保育のスキルアップのため」「勤務する園が認定を受けるにあたって参加した方が良いと考えたため」「勤務する園や自治体からの勧めがあったため」「その他」の選択肢から最も近いものを選択してもらった (Table. 5)。

Table. 5 研修会等への参加経験と参加の動機

	参加経験 人 (%)	参加の動機 人 (%)
県主催の やまほいく研修交流会	あり 41 (27.7)	自身の保育のスキルアップのため 17 (42.5)
	なし 103 (69.6)	認定を受けるにあたり参加した方が良いと考えたため 13 (32.5)
	NA 4 (2.7)	園や自治体の勧めがあったため 10 (25.0)
A市主催の 自然保育研修	あり 78 (52.4)	自身の保育のスキルアップのため 40 (53.3)
	なし 68 (46.3)	認定を受けるにあたり参加した方が良いと考えたため 8 (10.7)
	NA 2 (1.4)	園や自治体の勧めがあったため 23 (30.7)
		その他 4 (5.3)

県主催の「やまほいく研修交流会」に比べ、A市が独自に実施している研修への参加経験の方が多く結果となった。また、最も多い参加の動機は、「自身の保育のスキルアップのため」であることから、40~50%の保育者が自発的な動機で研修に参加していることがわかった。また、「やまほいく研修交流会」に参加したいかどうかを尋ねたところ、全体の87.2%に及ぶ129名が「参加したい」と回答した。保育者のほとんどが、自然保育の実践に関する知識やスキルを得るために、研修の機会を切望していることが明らかになった。

4 考察

自然を活用した保育の実施状況について、認定の前後で比較すると、8つの項目で認定後の方が有意に活動の頻度が多いという結果が出たことから、自然保育の認定が、屋外での自然を活用した保育活動の増加と関連していることが明らかとなった。また、自然保育に対する保育者の意識についてみると、自然保育の認定後は、屋外での遊びや活動を積極的に取り入れようとする意欲や、自然に関する知識を深めようとする探究心、及び屋外での保育に対する保育者の自信等が高まっていることがわかった。この背景には、自然保育の認定後には、園を挙げて屋外での活動を推奨するようになり、比較的自由に屋外での活動が展開できるようになったり、保護者や地域からの理解が得られやすくなったりしていることが影響していると考えられる。公立保育園では、安全管理や危険予防の観点から、園外の自然フィールドでの活動に慎重になる傾向があるが、県から「認定」という保証を得ることによって、これまでケガの危険や保護者の不安を考えて尻込みしていた活動にも、保育者がより積極的に取り組めるようになったと考えられる。

また、保育者自身の意識や行動の変化として、認定をきっかけに、いつもの散歩コースなど、日常的に使っていたフィールドを自然保育の観点から捉え返し、その豊かさにあらためて気づくことができたという声が複数あった。自然とじっくり関わることを保育者自身が意識するようになり、子どもたちと共に季節の小さな変化に気づくことができるようになるなど、少なからぬ意識の変化が生まれていることが明らかになった。勤務園が認定を受けることがきっかけとなって、これまで見過ごしてきた身近な自然を意識するなど、自然に対する感受性が研ぎ澄まされる効果が生まれているのかもしれない。

一方で、屋外活動のあり方について職員同士で話し合う機会や研修会に参加する機会の多さ、安全管理に対する職員の意識の高さについては、「とてもそう思う」との回答は3割前後にとどまっている。個々の保育者の意識に変化が生まれてはいるものの、それを保育者同士で共有し、園全体で高める機会や場は、保育者を満足させるほど十分にあるとは言えないのではないかと。「やまほいく研修交流会」に参加を希望する保育者の多さが、それを裏付けている。

本調査を通して、自然保育の認定を受けた公立保育園に勤める保育者の多くが、認定をきっかけに、積極的に自然保育に取り組もうとしている姿が浮き彫りとなった。しかし、保育者は、認定後に自然を活用した保育に対する考えや態度を、突然変えたわけではない。従来から行ってきた屋外活動を「自然保育」という観点からあらためて見直した結果、その豊かさを再発見したという側面にこそ着目するべきである。つまり、認定は、保育者自身が、もともと行っていた実践を振り返り、あらためてその意味を意識するための一つの契機として作用したということである。

今回の調査は、長野県の中でもA市のみを対象としたものであるため、認定を受けた園の保育者全てがこのような傾向にあるとまではいえない。今後、同様の調査を長野県全体で実施し、検証していく作業が必要となるであろう。

注

- 1) 長野県HP内の「信州型自然保育認定制度実施要綱」を参照。 <https://www.pref.nagano.lg.jp/kodomo-katei/kyoiku/kodomo/shisaku/documents/h30jisshiyokou.pdf#search=%27信州型自然保育実施要項%27> (2019年8月29日最終アクセス)
- 2) 「森のようちえん」とは「自然体験活動を基軸にした子育て・保育、乳児・幼少期教育の総称」。森のようちえん全国ネットワーク連盟HP <http://morinoyouchien.org/about-morinoyouchien> (2019年8月29日最終アクセス)
- 3) 2019年8月現在で認定を受けている公立保育園・認定こども園の数は全体で135園であるが、伊那市の高遠第2・第3保育園は「特化型」認定を受けているため、「普及型」認定を受けている公立園の数は134園となる。

引用・参考文献

- 茶谷智之 (2017) 「自然環境と幼児理解の視座：自然保育ポータルサイトの実践例の分析から」『帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要』第4巻
- 酒井真由子 (2018) 「信州型自然保育研修会における短期大学の役割：「信州上田“やまほいくの里山プロジェクト”：上田女子短期大学の裏山で遊ぼう」事業を通して」『上田女子短期大学児童文化研究所所報』第40号
- 高木三郎 (2017) 「「信州型自然保育認定制度」の創設過程と意義についての考察」『富山短期大学紀要』第53巻
- 高野牧子・打越みゆき・山田英美 (2011) 「保育者養成における野外教育」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』第6巻
- 山口美和 (2016) 「「森のようちえん」をめぐるポリテイク：「信州型自然保育」検討委員会の議事録分析を通して」『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室紀要』第42号

The Influence of the “Shinshu-type Authorization System of Early Childhood Education and Care in Nature” on the Awareness and Behavior of Nursery School Teachers

Miwa YAMAGUCHI* · Machiko TERA**

ABSTRACT

The purpose of this study is to establish the influence of the “Shinshu-type Authorization System of Early Childhood Education and Care in Nature” on the awareness and behavior of nursery school teachers. A survey was conducted with 158 nursery school teachers working in 13 public nursery schools in A City in Nagano Prefecture. Following accreditation by “Shinshu-type Authorization System of Early Childhood Education and Care in Nature” the frequency of activities utilizing nature was higher than before accreditation. Accreditation increases the willingness and confidence of nursery school teachers to organize activities that utilize nature. Approximately 90% of nursery school teachers would like to participate in workshops to acquire knowledge of activities that utilize nature. The creation of an environment that makes it easy for nursery school teachers to participate in such training is essential.

* School Education ** Ishido-Kirari Child Care Center, Oyabe City